第３章　　世界の地域と国々

１節　アジア

アジア(Asia)は紀元前 8、７世紀頃、メソポタミアに住んでいた人々の言葉で東、日の出を意味する Asu に由来する。アジアは東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアの五つの地域に区分するのが一般的である。極東や中近東の区分もあるが、これらはヨーロッパ、中でもイギリスを基準にした呼び方で、はっきりした地域を指すものではない。また、ユーラシアの名称は 19 世紀にヨーロッパとアジアを繋いだ合成語である。

山脈名 ― アジアと欧米の違い

アジアの地形も気候と多様である。地球の表層を形づくるプレートが 2 億 5,000 万年前頃に移動、衝突、そして 4,000 万年前２つのプレートの間にあった海をもちあげヒマラヤ山脈になったと考えられている。その影響でパミール(*)を中心にクンルン山脈、カラコルム山脈、ヒンズークシ山脈などが四方に伸びた。そして、ここから黄河や長江、メコン川やチャオプラヤ川、ガンジス川やインダス川が流れ出し、流域に沖積平野を形成し多くの人々の生活舞台になっている。

ヨーロッパを代表するアルプス山脈のアルプスは高山の放牧地、アメリカのロッキー山脈は岩石が多い山脈など見た通りの地名である。これがアジアになるとヒマラヤは、サンスクリット語で、hima（ヒマ「雪」）+ ālaya（アーラヤ「すみか」）から「雪の住みか」、「エベレスト」は、インド測量局で長官を務めたジョージ エベレスト氏にちなんで命名だが、チベット語の「チョモランマ」（ChomoLangma）は「母なる大地」、ネパール語で「世界の頂上」を意味する「サガルマータ」(Sagarmatha)となる。

崑崙は古代の伝説上の山岳で中国の西方にあり、黄河の源で玉を産出し、仙女の西王母がいるとされた。カラコルムは、氷河の多くが瓦礫に覆われていることから「黒い砂利」（トルコ語）の意味。ヒンズークシュはペルシャ語で「インド人殺し」である。高山が連なり、多くの峠が古来東西交通の要衝でありながら、多くの人々が苦しめられた名残だろうか。天山山脈は「天に至る道」を意味し、最高峰のハンテングリ山は、大理石からなる山で「精霊の王の山」と、欧米とは違って意味深い地名となっている。なお、この傾向はアラスカや南米大陸の先住民族の間でもみられる。北米大陸最高峰のデナリは「偉大なるもの」、南米大陸最高峰のアコンカグアは「岩の番人」、エクアドル最高峰のチンボラソは「青い雪」などである。

（＊）　パミール　　パミールはペルシャ語で「世界の屋根」を意味する。パミールの南東にはカラコルム山脈とヒマラヤ山脈が、南西にはヒンズークシュ山脈とスライマーン山脈、東にはクンルン（コンロン）山脈、北東にテンシャン（天山）山脈が伸びている。これらの大山脈が一カ所に集まることから「世界の屋根」とよばれている。ところで、日本での表記は「パミール高原」で、英訳すると Pamirs Plateau （Highland） となる。しかし、英語圏ではこのように表記されることはなく、単に The Pamirs である。

東、西アジアで降水量が違う

アジアは大きくみると、シベリアなどの北部は寒さが厳しく、内陸の中央アジアは乾燥が著しく、東部と南部は湿潤な気候となっている。アジアの湿潤な気候は、主としてモンスーンによってもたらされる。なかでも、茶の生産地として知られるインドアッサム地方は、年間降水量が 10,000 ㎜を越える世界最多雨地域の一つとなっているが、冬季は大陸から吹き出すモンスーンのため降水量

は極端に少ない。このようにモンスーンの影響を強く受ける地域をモンスーンアジアとも呼んでいる。これに対して、大陸内部に位置するモンゴルや中央アジアから西アジアにかけては、海洋の影響が少なく、中緯度高圧帯におおわれるため降水量が少なく、沙漠やステップ気候となっており、乾燥アジアとも呼ばれている。

＜モンスーン＞

インドのモンスーンは６月頃から強まり、雨季が始まる。６月から９月までの４ヶ月間に年間降水量の約 80%が降る。インドは３月～6 月の夏、７月～10 月の雨季、11 月～2 月は冬と季節が変わる。雨季は「モンスーン」と呼ばれ、雨が酷暑を和らげてくれるので歓迎されているが、湿度は高く、蒸し暑さは日本の夏に似ている。モンスーンによる雨は、日本のようにしとしとと降るのではなくスコール型が多い。このようにインドや東南アジアでのモンスーンは、風よりも雨を意味している。冬にはほとんど雨は降らず乾燥しているので、ヒマラヤの白い峰々を眺めながらのトレッキングには最適な季節である。

なお、エヴェレスト初め 8,000mを越す 14 座の初登頂日を見ると、モンスーン前の５月に集中している。ポストモンスーンの 10 月に１座で、ヒマラヤの北西部のカラコルムになると６～７月登頂が目立つ。

＜モンスーンとインド航路＞

1497/7/8　バスコ ダ ガマは、国王マヌエルの命を受け、４隻の帆船、170 名の乗組員でリスボンのテージョ河口からインドに向け出帆した。11/22 喜望峰を回り、大陸沿岸に沿って北に進んだ。ケニア、モンバサの北東 100 ㎞のマリンディに 4/4 に到着した。ここでインド洋を商業圏としていたイスラム教徒の水先案内人を雇って、３週間ほどモンスーンの吹き出しを待ってからインドに向け 4/28 に出港している。南西の追い風に乗り、インド、カリカット着が 5/20。肉食民族には欠かせないコショウやグローブなどの香辛料を大量に積んで 8 月末に帰途に就くが、乗組員の 60 名が既に死亡していた。途中、暴風に遭いさらに多くの乗組員を失い、55 名でリスボン港に９月に帰航した。

喜望峰（南ア）

民族も宗教も複雑

アジアには、東の日本から西のトルコまでの間に 40 近くの国があり、そこに住む人々は 40 億を優に越す。世界の総人口は 81 億 1900 万人(2024)の約６割にあたる。最も人口が多いのはインドで 14.42 万人（17.8%)、２位が中国の 14.25 億人(17.6%)で、２ヶ国だけでアジアの 61%を越える。

世界にはおよそ 3,000 数百の民族がいるといわれている。国家は 200 弱だから１国家は複数の民族で構成されている多民族国家が一般的である。勿論、日本も多民族国家だが、人口１億を超す

国で 1 つ言葉だけで不自由のないのは世界的に見ると例外的な存在である。例：中国 56 民族、カナダ 34 民族など。

> ＊ **民族の定義：一定の地域に住み、同じ言葉を話し、共通の生活習慣をつくりあげ、共通の祖先の意識をもつ人々の集まり**
> 例（日本民族とは、「日本列島に住み日本語を話し、日本食を食べ、地域差はあるが同じよう生活習慣を身に付け、日本人だという意識をもった人々のこと」）

アジアの宗教もまた複雑である。ヨーロッパや新大陸はキリスト教徒が多いが、アジアは仏教、キリスト教、イスラム教の世界三大宗教に加え、ヒンズー教、ユダヤ教、チベット仏教（ラマ教）、シーク教、儒教、道教、神道などなど様々な宗教が入り混じっている。

産業と経済

産業革命以降、「世界の工場」と呼ばれたイギリスを中心にヨーロッパ諸国が世界の経済、貿易面でリードしてきた。アジア諸国は植民地となり、先進国の製品市場及び原料、食料の供給地となっていた。ところが、2 度の世界大戦を契機にヨーロッパの地位が低下すると、19 世紀末に世界最大の工業国となったアメリカは、様々な分野で世界の中心的な存在となり、アメリカの時代を迎える。

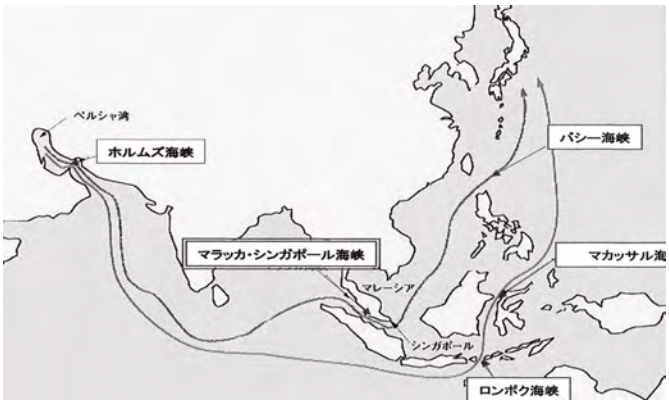
しかし、そのアメリカも 1970 年代頃から、鉄鋼や自動車などの分野で、設備の更新や生産の合理化に立遅れ、日本やドイツなどに押されるなど、国際競争力が弱まっていった。日本は早い時期に戦後の経済復興を遂げた。他のアジア諸国では、中東の産油国が 70 年代の石油危機以降、豊富な石油資源を背景に高い経済成長を続け、富裕国の仲間入りを果たした。

韓国、台湾、香港、シンガポールのアジア NIES 諸国 (*) は、積極的に先進国の資本、技術を導入した結果、アメリカや日本などの労働集約型産業が進出し、工業化が急速に進んでいる。

（＊）NIES は Newly Industrializing Economies の略。発展途上国のなかで 20 世紀後半に急速な経済成長を果たした国･地域の総称

アジアの日本

日本の貿易相手国は、かつてはアメリカ合衆国が最も多かったが、近年は輸出、輸入共に中国をはじめアジアが中心となり、その割合は 60%に達している。日本は中東諸国やオーストラリアなどの資源輸入国や中国などの一部の国では日本が輸入超過となっているが、多くは日本の大幅な輸出超過となっている。



PC から引用

日本からの輸出は、機械類、自動車などの工業製品や部品がほとんどであり、輸入は原燃料の合計が約 30%にもなる。他には食料品や軽工業製品である。特に、近年は多くの電気機器等の輸入が急増している。日本で使用する石油の大部分をサウジアラビア、アラブ首長国連邦、カタール、クウェート、イラン、イラクなど西アジア諸国やロシアやインドネシア、ベトナムなどの東南アジアなどの国々から輸入しており、自給

率はわずかに 0.3%である。日本の原油の西アジア（中東）依存率は 95%（2024）を超し、世界の工業国の中でも飛びぬけて高い。西アジアからの石油輸送路を見ると、ペルシャ湾から日本までのルートは２つで、通常ルートはマラッカ、シンガポール海峡経由で 6,000 ㎞、超大型タンカー及び迂回ルートはロンボク海峡マカッサル海峡経由になると 7,700 ㎞で 3 日長くなる。なお、ホルムズ海峡とマラッカ、シンガポール海峡の政治経済的にきな臭いところであり、日本の外交バランスが求められている。